

Title	がんとレチノイン酸
Author(s)	瀧原, 義宏
Citation	癌と人. 23 P.40-P.40
Issue Date	1996-03-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/23895
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

がんとレチノイン酸

瀧原義宏*

この度、“一般学術研究助成金”の援助を賜りましたこと、心から感謝いたしますとともに、皆様のご好意に厚く御礼申し上げます。

15年前に医学部を卒業し、直ちに内科学教室に入局すると同時に内科医師としての修行を開始し、“どのような病気でも見ることのできる内科医”になる筈であったのですが、ヒトの病気の原因を遺伝子をはじめとして、分子のレベルで語ることに魅力を感じ、軽い気持ちで、基礎医学の生化学教室に大学院生として入れて頂いたのが13年前。その後、幸か、不幸か、多くの良き師に恵まれ、一度は臨床に戻り、臨床血液学分野で、多くの白血病やリンパ腫の患者さんと苦楽を共にしておりましたが、5年前から大阪大学微生物病研究所で専ら基礎研究に従事し、患者さんにお目にかかる機会から日に日に遠ざかりつつある今日この頃です。

さて、このような数少ない臨床経験の中で、特に理由があったわけではないのですが、血液疾患に特別な思いを持って臨んでいました。その中でも、急性前骨髄球性白血病は、たくさんの赤く染まった顆粒を持った大きな細胞がぎっしり骨髄に詰まったその“華やか”な骨髄所見と、発病初期に時に致命傷ともなりうる激しい出血症状を伴うことが多いことなどから、忘れ難い病気の一つでした。白血病の治療といえば、最近では骨髄移植療法が発展し、その治療成績

の改善には目覚ましいものがありますが、その基本は抗がん剤による化学療法です。一方、丁度私が微研に赴任した頃から、ビタミンAの一つであるレチノイン酸が、白血病細胞の分化を誘導し、脱がん化させることによって、この急性前骨髄球性白血病に著効することがわかってきました。

以上のような思い込みと、いくつかの短絡思考とから、レチノイン酸による細胞分化の分子機構を分子レベルでそして個体レベルで明らかにしたいと考え現在に至っています。実際には、F9と呼ばれるマウスの胚性腫瘍細胞をレチノイン酸で分化誘導する系をとりあげ、分化誘導にもなってその発現が誘導される遺伝子群の中から、蛋白質の分画の番号をそのまま引き継いで、14-3-3というユニークな名前と呼ばれる遺伝子やポリホメオティック遺伝子と呼ばれる形態形成の制御遺伝子について研究を進めています。前者は細胞の増殖・がん化・分化の制御に関わるシグナル伝達の制御に関わっていることを明らかにすることができましたし、後者については、この遺伝子を破壊したマウスを作製することに最近成功し、遺伝子機能の解明に一步前進することができました。今後、レチノイン酸の作用とのより直接的な関係、さらに、各種疾患の病態との関連などにも研究を進めるべく、精進する所存です。

* 大阪大学微生物病研究所難治疾患バイオ分析部門、遺伝子疾患研究分野、平成5年度研究助成金交付者